教育実践研究　第27集（2017）　181－186

［特別活動］

目標と活動と評価の一体化によって全校がひとつになる生徒会活動

－ファシリテーショングラフィックを活用して－

小松　祐貴*

1　はじめに

ＯＥＣＤ（経済協力開発機構）のＰＩＳＡ調査など各種の調査から，我が国の児童生徒については，以下の①～③の課題が見られる。①思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式問題，知識・技能を活用する問題に課題，②読解力で成績分布の分散が拡大しており，その背景には家庭での学習時間などの学習意欲，学習習慣・生活習慣に課題，③自分への自信の欠如や自らの将来への不安，体力の低下といった課題。③については，本校も例外ではなく，各種調査の結果から，生徒の自己肯定感が低い傾向が見られた。そこで，研究主題を「学び合い高め合う集団づくり～自己肯定感の向上を目指して～」とし，学び合いを通して自己肯定感の向上を目指している。具体的には，特別活動と授業改善を２本柱に，意図的かつ組織的に学び合いを仕組み，集団づくり，集団活動を通して，個性の伸長を目指すものである。

特別活動の目標は，学習指導要領第５章の第１「目標」で，次のように示されている。「望ましい集団活動を通して，心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り，集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的，実践的な態度を育てるとともに，人間としての生き方についての自覚を深め，自己を生かす能力を養う」。このように，よりよい生活や集団を自らの手で作ろうとする自治的活動は，本校が目指している自己肯定感や集団への所属感を高め，学習や部活動に意欲的に取り組む土台となるものと考える。この自治的活動を促すために，評価活動を取り入れた生徒会活動を実践した例は多い。荒木（2009），佐藤（2010）は，評価活動の有効性をリーダーの変容を中心に述べている。また，黒田（2010），高橋（2011）は，相互評価を活用し，児童・生徒のつながりを生む実践を行い，リーダーとフォロアーの変容を報告している。しかし，いずれも事後の評価活動によって活動の改善を図るものであった。また，目標や評価も他者から与えられたものが多い。本研究では，活動前に，全員で，どのような姿を達成目標とするのかを明確にする。また，それに向けた活動をどのように評価していくのか，共有する。こうして，目標と評価を一体化することによって，目標と評価を意識した活動へと改善を図る。つまり，「目標と活動と評価の一体化」によって，全校が目標を見据えて同じ方向に進む状態，「全校がひとつになる」ように，生徒会活動を展開していこうというものである。

2　「目標と活動と評価の一体化」を図る

生徒会活動の目標と実際の活動，そして評価を一体化させることによって，一貫性を持たせた自治的活動を促す。自治的活動を通して，「全校がひとつになる」ことが，所属感や自己肯定感を高めることにつながるものと考える。

そこで，目標と活動と評価を一体化するため，次の３つを意識して取り組んだ。①目指すものがシンプルなこと，②評価時期が明らかなこと，③評価方法が明らかなことである。このための具体的方策が以下の⑴～⑸である。

⑴　年間を貫くスローガン（合言葉）を設定する

生徒会役員選挙の際に，生徒会長が公約として掲げた「きめる」をキーワードにすることで，１年間の目標をシンプルにして，統一感を持たせる。目標の評価は，年度末の生徒総会で，「きめる」姿が見られたかどうかで判断する。

⑵　がんばる期を設定する

学校行事をもとに１年を６分割（①学年遠足　②部活動の大会　③体育祭　④合唱祭　⑤いじめ見逃しゼロスクール集会　⑥卒業式）し，行事までの過程や行事を通して，目標である「目指す姿」を明確にする。また，各がんばる期の終わりに「目指す姿」に近づけたか振り返り，活動の評価とする。

＊ 上越市立春日中学校

⑶　話し合いを可視化する

目標設定や評価の際に，３色付箋紙を使ったファシリテーショングラフィック（以下，FG）で話し合いを行う。これにより，自分の考えが見えるようにしたり，他の考えが見えるようにしたりして考えを共有する。さらに，活発に意見交流させ，自分の考えを深め，変容させる。

⑷　評価を可視化する

生徒が成果を実感し，次のステップに向けた自信につなげたり，効果を判断し次の活動へ生かしたりするなどフィードバックを意識して評価を可視化する。具体的には，昼の放送や掲示物，生徒会通信などがある。この際，職員は「評価＝見ること，見ていることを伝えること」を心がけ，短学活などで補足する。職員も目標である「目指す子どもの姿」を共有しているので，効果的なフィードバックが可能になる。こうして，評価によって更に目標が共有化されていく。

⑸　目標，評価を共有することで，集団が同じ方向を向いた活動にする

生徒の目標設定に先立って，職員集団が行事を通して「目指す子どもの姿」を話し合い，到達するための方策を練る。その後，生徒は，３色付箋紙を使ったFGにより，目標である「目指す姿」を共有する。生徒と職員，相互に目標を共有することで，責任を分かち合い，同じ方向を向いて活動を始める。また，話し合いの記録を掲示したり，評価を可視化したりすることで，目標でもあり，評価の基準でもある「目指す姿」を意識した活動を展開する。

３　実践の成果と考察

⑴　年間を貫くスローガン（合言葉）を設定する

生徒会役員選挙から生徒会活動はスタートする。図１は，生徒会役員選挙立会演説会のようすである。候補者の背景にあるように，生徒会長は「きめる」を公約として掲げた。この「きめる」というキーワードを採用し，生徒会スローガンを「きめる春日中」とした。

⑵　がんばる期を設定する

学校行事をもとに１年を６分割し，行事までの過程や行事を通して「目指す姿」を明確にした。また，各期の終わりに「目指す姿」に近づけたか振り返り，評価を行った。図２は，生徒玄関に掲示した各期のスローガンである。

図１　生徒会役員選挙立会演説会

図２　生徒玄関に掲示した各期のスローガン

表１　生徒会スローガンと各期スローガン

生徒会スローガン	きめる春日中！！
第１がんばる期（学年遠足）	スプトラ（学年遠足の愛称）できめる！　出会いを大切に
第２がんばる期（部活動の大会）	部活動できめる！　活・喝・勝
第３がんばる期（体育祭）	体育祭できめる！　春日はひとつ
第４がんばる期（合唱祭）	合唱祭できめる！　想いをひとつに
第５がんばる期（いじめ見逃しゼロスクール集会）	春日はきめる！　ＡＡＡ（安全・安心・安定）に向かって
第６がんばる期（卒業式）	卒業式できめる！　PRIDE of Kasuga

表１は，生徒会スローガンとがんばる期のスローガンである。生徒会長が選挙公約に掲げた「きめる」をキーワードに１年間の目標を設定した。また，副会長２名の公約は，「一体感（ひとつ）」，「ＡＡＡ」であったため，みんなが同じ方向を向くための合言葉として，各期の副題に取り入れた。これにより，「生徒会活動は，２年生の生徒会選挙で始まり，１年間その目標を意識して活動していく」という意識になったことが，表２の会話分析からうかがわれる。この会

話の中で，まず，生徒会の副会長である生徒Aが，今年度のスローガン「きめる」について話をした。これに対して，生徒Bは，会長候補が一人なので，この候補が掲げている「つながる」が，同じように来年のスローガンになるだろうと返した。また，生徒Cは，副会長候補が掲げている「加速」や「共笑」が，各期のスローガンに採用されるだろうと予想しているのである。なお，会話データは，生徒会選挙の選挙公報を学級で読み合せている３年生のグループのものである。グループに設置したICレコーダに録音したものを以下の方法でトランスクライブして分析した。

記述の方法

・発話の単位は，間と内容によって設定する。

・発話者をアルファベットで示す。

記号

／／	発話の重なり。
(5)	５秒の沈黙
,	少しの間。
。	区切り。語尾の下降。
？	語尾の上昇。
＜ ＞	筆者による補足。
下線	筆者による注。

表２　生徒会選挙の選挙広報について学級で読み合せているグループの様子

01	A	＜生徒会長＞Mの「きめる」って＜目指す姿が＞分かりやすかったよね。何でも「きめる」だったしね。
02	B	来年は「つながる」＜生徒会長候補の公約＞かね。
03	C	＜生徒会副会長＞Aちゃんのトリプルエー＜安全・安心・安定＞もスクール集会の時に使われたよね。
04	A	「加速」とか「共笑」＜生徒会副会長候補の公約＞は、どの行事で使うんだろうね？ 「共笑」はやっぱスクール集会かなぁ？
05	B	体育祭でも使えるんじゃない？
06	A	あーっ，＜立会演説会で＞私質問しなくちゃいけないんだぁ。

また，年度末の２月に３年生の学級で行った調査（表３）では，すべての生徒が，生徒会スローガンを覚えていた。さらに，６期のスローガンについても約９割の生徒が全て覚えていた。このことから，それぞれのスローガンが，飾りではなく，意識される目標，もしくは，評価の基準として機能していたものと考えられる。

表３　生徒会スローガンと各期スローガンの完答者数（N＝35）

生徒会スローガン	各期のスローガン
35人	31人

(3) 話し合いを可視化する－３色付箋紙を使ったファシリテーショングラフィック－

前述のように，生徒会役員選挙から生徒会活動はスタートした。この後の１年間，表４のように３色付箋紙を使ったFGによる話し合いを10回行った。学級活動に留まらず，委員会，部活動など様々な場面でも活用された。これは，３色付箋紙を使ったFGによる話し合いが，有効であることを職員，生徒が実感したからであろう。全国学力・学習状況調査（表５）によると，全国平均・新潟県平均と比較して，本校生徒が話し合い活動に自信を持っていることが分かる。

表４　３色付箋紙を使ったFGによる生徒の話し合いの機会とその内容

話し合いの機会	内　容
リーダー研修会（３月）	春日中の強み・弱み，　「きめる姿」とは？　「きめる」ための方策
生徒総会に向けた学級討議（４月）	春日中の強み・弱み，　「きめる姿」とは？　「きめる」ための方策
学級目標づくり（５月）	学級の強み・弱み，　目指す姿
第１がんばる期（学年遠足） 第２がんばる期（部活動の大会） 第３がんばる期（体育祭） 第４がんばる期（合唱祭） 第５がんばる期 （いじめ見逃しゼロスクール集会） 第６がんばる期（卒業式）	春日中の強みと弱み　（青色付箋紙） 行事で「きめる姿」とは？　（赤色付箋紙） →目標，評価規準になる 行事で「きめる」ためにやるべきことは？　（黄色付箋紙） →活動になる
生徒総会に向けた学級討議（４月）	学級，委員会，部活動で「きめた姿」　→評価になる

表５　全国学力・学習状況調査（生活習慣や学校環境に関する質問紙調査）において肯定的回答をした生徒の割合（%）

質問事項	本校	新潟県	全国
友達の前で自分の考えや意見を発表することは得意ですか。	90.9	81.1	79.4
学級会などの話し合い活動で，自分とは異なる意見や少数意見のよさを生かしたり，折り合いをつけたりして話し合い，意見をまとめていますか。	75.4	65.3	58.4

３色付箋紙は，青色付箋紙に春日中の強みと弱み，赤色付箋紙に行事で「きめる姿」，黄色付箋紙に行事で「きめる」ためにやるべきことをそれぞれ書く。ここで赤色付箋紙に書いた「きめる姿」が，目標と評価規準になる。そして，

黄色付箋紙に書いた「きめる」ためにやるべきことが，活動になる。このように，３色付箋紙を使ったFGによる話し合いが，目標と活動と評価を一体化させている。また，自分の考えや他の考えが文字として見えるので，安心して意見を発表できることも，この話し合いの手法が支持された一因と思われる。

これら生徒の話し合いに先立って，職員集団でも「目指す子どもの姿」を話し合い，実現に向けた方策を練った。この話し合いは，職員研修として行い，FGによる話し合いの手法を身に付けることも兼ねている。図３は，小グループでの話し合いのようす。図４は，シェアリングのようす。図５は，話し合いの結果であり，後日職員室前に掲示した。掲示したことで，生徒から「先生も一緒に考えて，一緒にがんばってくれているんですね」という声が聞こえてくるなど，生徒だけでなく，職員も含めて学校全体が同じ方向を見据えて活動する一助となった。

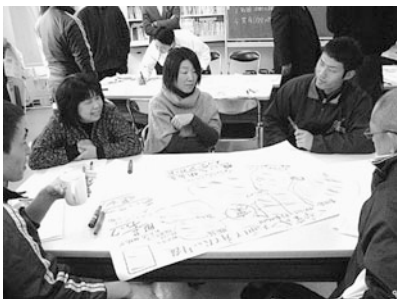

図３　グループでの話し合いのようす

図４　シェアリングのようす

図５　話し合いの結果（掲示物）

生徒の最初の話し合いは，３月のリーダー研修会で行った。研修は２日間の日程で行い，参加者は，次年度のリーダーになる正副委員長，正副級長，部長，生徒会役員の生徒80名と，それぞれの担当職員のべ50名である。全職員体制で生徒をサポートし，春日中の現状把握，次年度の生徒会活動の方針，目指す姿，そのために具体的にできることを話し合いで出し合ったり，４月に新入生を迎えるための準備をしたりした。この話し合いの際には，職員がファシリテーターとなって話し合いを進めるモデルを示した（図６）。この経験により，リーダーは，それぞれの組織で生徒どうしが話し合う際に，ファシリテーターを担えるようになった。

これまでの生徒会活動では，リーダーとフォロアーの意識にギャップが生じる場面が少なからずあった。同様に，職員間では，生徒会担当とその他の職員の意識にギャップが生じていると感じることがあった。しかし，表６の学校評価の結果，表７のリーダー研修についての職員振り返り（自由記述）から，生徒フォロアーの多くが，意欲的かつ仲間と協力しながら生徒会活動に取り組んでいたり，ほぼ全ての職員が目的をもって生徒会活動を指導したりできたことが分かる。つまり，生徒，職員ともに目標を共有し，同じ方向を向き，いずれのギャップも埋まっていったと考えられる。

表６　学校評価の結果

生徒アンケート（N＝180）	
委員会や部活動など，生徒会の活動に一生懸命取り組んだ。	94％
友達は，私のよいところを分かってくれている。	91％
友達のよいところを分かろうと努力した。	94％
職員アンケート（N＝46）	
学年部や生徒会委員会顧問は集団生活の改善のために生徒の自治的・自浄的な活動を意図的に実施した。	100％
生徒会専門委員会顧問は，生徒とともに生徒会活動の活性化を推進した。	98％
学級や部活動，生徒会活動では，生徒の所属感や自己有用感，自己肯定感を高めることができた。	100％
学級や部活動，生徒会活動で互いの良さに気づく機会を設けた。	100％

表７　リーダー研修についての職員振り返り（自由記述）

生徒のやる気に，教師が負けないようにしないと委員会活動が停滞するので，生徒のやる気を注入されたと思います。
生徒とともにFGの可能性を感じることができました。みんなが話し合いに参加できるところがよかったです。学級や委員会，部活動などでリーダーも活用してくれると思います。
例年は，生徒会担当と学年部職員だけで生徒を指導する感じだったが，この形にすることで，より多くの先生方が一緒に学校をより良くしていこうという雰囲気ができた。
FGの掲示物があり，話し合いの様子が見えましたし，有効だったと思います。

図６　リーダー研修での話し合い

(4) 評価を可視化する

生徒が成果を実感し，次のステップに向けた自信につなげたり，効果を判断し次の活動へ生かしたりするなどフィードバックできるように評価を可視化した。ここでは，生徒総会の取組を例に報告する。

本校では，生徒の自己肯定感が低い傾向にあるため，年度の評価をする生徒総会も，良かった活動に焦点を当て，肯定的な評価で前向きに次の活動を考える機会とした。また，評価が目に見えるように，学級討議ではFGによる話し合いを行い，掲示した（図７，８）。生徒総会では，学級討議ででた肯定的な意見をもとに，お互いの活動を称え，それぞれの活動の意味づけをした。生徒総会について，多くの職員が感じたように（表８），生徒は活動の成果を実感し，次のステップに向けた自信につなげることができたと考えられる。

図７　学級討議のようす

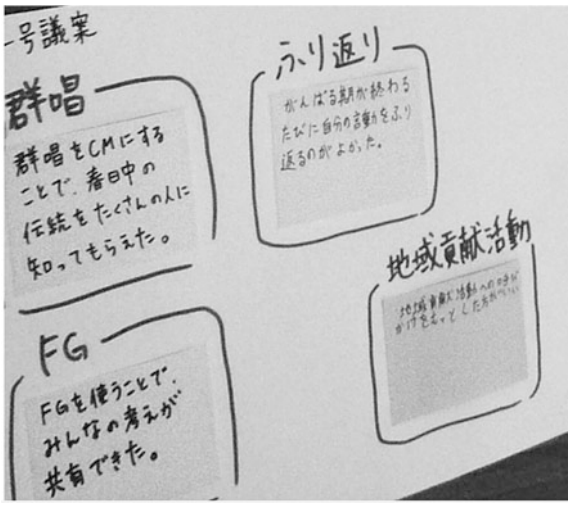

図８　学級討議ででた肯定的な意見（黄）と提案（赤）

表８　生徒総会についての職員振り返り（自由記述）

学級討議について
「よいだし」をするFGにより，成果をたくさん共有でき，活動の充実感を得ることが出来たとてもよいFGでした。
今年一年で慣れたFGを締めくくりにも使うのはとても良かったです。意見もたくさん出ました。
学級討議の内容が，肯定的で前向きな発言があり，自己肯定感を高めた。一方，もっときびしい発言もありかと思う。
どの専門委員会も意欲的に取組を進めたため，成果が上がったと思います。それを的確に捉えた前向きな発言が多かったと思います。
生徒総会について
今年度の活動が評価され，次年度への励みになりました。とてもよかったと思います。
肯定的な捉え方は次への動機づけになりますね。
３年生は最後まで生徒会活動に誇りを持っていたと感じられる準備でした。
発表内容がお互いをたたえる内容で，よいところを出し合っていたのでとても良かったと思います。教職について20年以上たちますが，このような温かい雰囲気の生徒総会は初めてでした。感動しました。
肯定的な意見や前向きな意見が多く，温かい雰囲気でよかったと思いました。しかし，別に反省や課題をまとめて次年度に生かすための場面も必要だと思います。

(5) 目標，評価を共有することで，集団が同じ方向を向いた活動にする

目標，評価を共有することで，集団が同じ方向を向き，ひとつになれることを目指した。ここでは，体育祭での取組である「プロジェクトONE」を例に報告する。「プロジェクトONE」は，その名の通り，「ひとつ」になるための取組である。体育祭のスローガンは，「体育祭できめる！　春日はひとつ」である。このため，まず，FGによる話し合いで，

図９　体育祭通信（第６号）

表９　体育祭通信の内容

生徒の気づき	体育祭実行委員のコメント
礼がそろっていた。	気持ちが「ひとつ」にそろったことの表れですね。どの軍もどんどん成長していますね。
指示を出したら，全員が真剣な態度で話をきいてくれた。	指示を出すのってドキドキですよね。不安ですよね。でも，真剣に聞いてもらえるから，がんばってその不安を乗り越えられるんですよね。だからリーダーは，みんなに感謝しています。お互いに感謝っていいね。
振り返りに書く量が初日とは比べられないほど多くなっている。	ひとつのシートに班の仲間のものが書かれているので，お互いの気持ちも感じられているのですね。
明日の体育祭を「きめる」「ひとつになる」というみんなの意志が伝わってきた。	お互いにその気持ちが感じられてきていますね。このプロジェクトONEの活動やおたよりがその役に立っていればうれしいです。

目標となる目指す姿を具体的にし，そのために具体的にできることを出し合った。そして，活動を通して「ひとつになったと感じた瞬間」，「ひとつになるために努力していた様子」をみんなで共有した。取組は以下①～④の手順を繰り返して行った。①全校生徒が，終学活で，その日見つけた「ひとつになったと感じた瞬間」を班ごとのワークシートに書いて共有する。②実行委員が全校のワークシートから共有したいトピックを選び，メッセージを添えて体育祭通信（図９）を作成する。③全校生徒が，朝学活で体育祭通信を読む。④実行委員が特に共有したいトピックを昼の放送で紹介する。

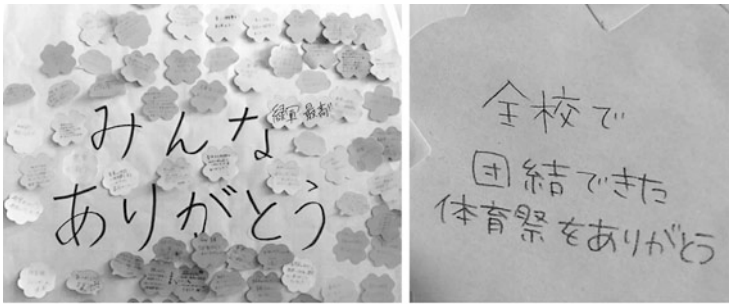

図10　感謝をつづったメッセージカード（左：全体，右：拡大）

表10　プロジェクトONEについての職員評価

仲間の思いを共有し，自分の思いも伝える，という取組が，大変だったとは思いますが，生徒の気持ちを高めて，ひとつにまとまっていったのだと思います。

このサイクルを繰り返すことで，「ひとつになるための行動」を意識して活動するようになったことが，体育祭通信の内容（表９）の「（班のみんながワークシートの）振り返りに書く量が初日とは比べられないほど多くなっている」や，体育祭後の感謝をつづったメッセージカード（図10）の「全校で団結できた体育祭」，職員の評価（表10）の「ひとつにまとまっていった」から，うかがえる。自分の行動と仲間の行動を目標である「ひとつ」に照らして意識的に見るようになった。つまり，目標と活動と評価が一体化していったと考えられる。

4　研究のまとめ

本実践では，生徒会活動の目標と活動，評価を一体化させることによって，自治的活動の活性化をねらった。この自治的活動を通して，全校が同じ方向を向いてひとつになることが，生徒個々の所属感や自己肯定感を高めたと考えられる。具体的には，以下の①～④の効果が認められた。

①生徒会選挙の公約をスローガンにすることで，目指すものがシンプルになり，年間を通して意識される目標，もしくは，評価の基準として機能する。②３色付箋紙を使ったFGによる話し合いによって，生徒，職員ともに目標を共有し，同じ方向を向いて活動できる。③肯定的な評価を可視化することで，生徒はお互いの活動を称えたり，それぞれの活動の意味付けをしたりでき，それが，自信や意欲につながる。④目標と評価を共有することで，自分の行動と仲間の行動を目標に照らして意識的に見るようになり，みんなが同じ方向を向いた活動になる。

しかし，一方で課題もある。FGによる話し合いは昨年度から始めた取組である。当初は，目新しさも手伝って活発な話し合いが行われていたが，回数を重ねるごとに，慣れて効率よく話し合いが進められる一方，形式的な話し合いに陥る傾向がある。付箋紙やホワイトボードなど様々なツールを使って改善を図っているが，２年，３年と継続していく中で，どのように意欲を持続させていくかが課題となっている。

参考文献

水落芳明・阿部隆幸『成功する『学び合い』はここが違う！』学事出版，2014年
伊藤修也・冨田憲太郎・水落芳明「学習者による「目標と学習と評価の一体化」の効果に関する事例的研究－中学校１年英語文法学習を通して－」『臨床教科教育学会誌』12(2)，2012年，9-16pp
荒木充「「評価活動」を生かした生徒会活動の取組について」『教育実践研究』第19集，上越教育大学学校教育センター，2009年，155-164pp
佐藤吉史「当たり前のことを当たり前にする生徒の育成」『教育実践研究』第21集，上越教育大学学校教育センター，2011年，233-238pp
黒田隆夫「「縦」「横」「斜め」のつながりを意識した係活動の試み」『教育実践研究』第21集，上越教育大学学校教育センター，2011年，239-244pp
高橋淳一「ショートスパンの相互評価を生かした生徒会活動の取組について」『教育実践研究』第22集，上越教育大学学校教育センター，2012年，243-248pp
文部科学省『中学校学習指導要領解説　特別活動編』，ぎょうせい，1999年